

年間第 32 主日 (マタイ 25:1-13)

神に呼ばれるそのときには用意を整えて待つ



今週の福音朗読の半ば、賢いおとめたちも愚かなおとめたちも、皆眠り込んでいて起こされる様子が描かれています。「ところが、花婿の来るのが遅れたので、皆眠気がさして眠り込んでしまった。真夜中に『花婿だ。迎えに出なさい』と叫ぶ声がした。そこで、おとめたちは皆起きて、それぞれのともし火を整えた。」 (25・5-7)

これが何を表しているかということ、賢いおとめも、愚かなおとめも「花婿だ。迎えに出なさい」と眠っているところを起こされた。この条件は同じだということです。違いが出たのは、眠り込む前に、賢いおとめは次に必要になることを備えていたこと、愚かなおとめは備えがなかった、ということです。

中田神父が「備え」ということでいつもたとえに使う出来事があります。それは新生児の誕生の出来事です。新生児はお母さんのお腹の中で10ヶ月過ごし、生まれてきます。もし、お腹の中の10ヶ月さえ過ごせばそれで良いというのであれば、何かを食べるための「口」も、匂いを嗅ぐ「鼻」も、必要ないかも知れません。

しかし、10ヶ月経って生まれ出てくれば、その瞬間からさまざまな能力が必要になります。目・口・耳・鼻、数え上げればきりがありませんがそれらがすぐに必要になってくるのです。「しまった！準備してなかった。今から準備しよう」では間に合わないわけです。

これは朗読のおおとめたちの心がけをよく教えてくれます。おとめたちは、ともし火をともしすることで働かれます。ともし火のための油を切らしてしまえば、自分の働きを果たせなくなるのです。「ともし火を、今さえともしておけば大丈夫」愚かなおとめたちはそう思ったのでしょう。眠気が差して、起こされた時、次の場面で必要な油を用意していませんでした。「今さえ良ければ」という考えしかなかったからです。

賢いおとめたちは違いました。彼女たちは次の場面で必要になるものを、ちゃんと準備していました。眠りから覚めた時、賢いおとめたちも今必要な油はなくなっていて、次の場面で必要な油、準備しておいた油を用意したのです。

花婿と一緒に招かれる婚宴の席。それは戸が閉められ、私たちが過ごす「今」とはきっちり分けられる場所のようです。次の場面で必要な準備がなければ、「開けてください」と言っても「はっきり言うておく。わたしはお前たちを知らない」 (25・12) と言われてしまうのです。

賢いおとめたちが準備していた壺の中の油とは何でしょうか。それは「神への愛と信仰」かも知れません。今さえ良ければ構わないという生活であれば、神への愛も信仰も、整えなくても生きられるでしょう。日曜日に早起きして一時間二時間、神様のために時間を使う必要もないでしょう。

しかし天の国では、「あなたを信じて生きていました」と証明する

全能の神よ、聖なる福音をふさわしく告げるため、わたしの心と口を清めてください。

ものが必要なのです。あるいは朝晩の祈りであるとか、隣人に手を差し伸べて愛のわざを行うとか、教会のために維持費を納めるとか、そうしたことが「油」となって、宴に招かれるのではないのでしょうか。

「今は忙しい。歳を取ってゆっくりしてから信仰も愛のわざも取り組みます。」本当にそれで良いのでしょうか。ある人は「今取り組まなければ、残された時間は数ヶ月です」と宣告されるのです。今週の福音朗読の結びはこうです。「目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」 (25・13)

年間第 33 主日(マタイ 25:14-30)

福音のことばによって、わたしたちが罪から清められますように。